

生成文法生誕 50 周年を過ぎて

— た と え ば ド イ ツ 語 学 と 新 言 語 学 と の
馴 染 み 具 合 —

田 原 薫

1. 学説／方法論の「賞味期限」と引退の時期

1957年にチョムスキーの *Syntactic Structures* が世に出て変形生成文法が誕生してから、2007年で半世紀が過ぎたことになる。その間、内容的にはさして深くもなく科学的でもないにも拘らず、人間の理性の極致であるかのような宣伝の巧みさによって、自然科学の厳しさを知らない、ひたすら文学的な、或いは文系的な言語学者という人々の心を掴み、不当な名声を博してきた理論として、この変形生成文法の右に出るものはない。しかし実際は、彼が1995年に出した *The Minimalist Program* 中の Chapter 4. にあたる ‘Categories and Transformations’ の枠組（以下、C&T理論）では、そもそも文の生成ということができなくなっているから、この年を以て彼の理論体系は耐用年数或いは賞味期限が終わったというべきである。

このC&T理論では、文の構築は、Lexicon から拾い集めた語彙項目〔最初から格や時制人称活用などを備えている〕すなわち文成分を、Merge(併合)と Move(移動)という操作によって順次結合して行なわれる。つまり〔初期の分析文法でなく〕構築文法の過程を踏むのであるが、構築の途中〔読み出し分岐点=‘Spell-Out’と呼ばれる〕で2岐に別れてPF（音声形式）とLF（論理形式）とに到達する。有意味なレベルはPFとLFのみであり、適格文はPFとLFの双方でそれぞれ‘Full Interpretation’〔完全解釈〕という検査を受けてパスした構築物だけである。構築物がどちらかで落ちれば、派生全体が‘crash’=破綻する、という。またPFとLF構築への共通の出発点は、Lexicon から語彙選択(lexical choice)の操作によって選出され準備された ‘numeration’〔使用度数つき語彙準備〕である、という。しかし語彙を任意に選んだのでは収束する確率は殆どゼロであろう。

以上に関して読者が抱くであろう当然の疑問に、Chomsky[1995] は次のように答える。
“Within the framework just outlined, there is also no meaningful question as to why one numeration is formed rather than another — or rather than none, so that we have silence. That would be like asking that a theory of some formal operation on integers — say, addition — explain why some integers are added together rather than others, or none. ...”〔同著 p.227〕

この「足し算の比喩」は狡猾なはぐらかしであり、グロテスクな居直りであろう。もしこの記事／発言がチョムスキーのまじめな考えを表わしているとするならば、彼の知性の低さを露呈するものであろうし、わかっていて読者を煙に巻こうという意図なら、騙される読者の方も悪い。彼が‘say, addition’「たとえば加法だが」と言ったからには、即座に‘say, division’「では除法はどうか」と自問してみるのが知性ある読者の態度であろう。整数のみを巻き込む加法という演算では、答えは必ず一つ、そして一つだけ決まり、その答えも整数に属する。加法という演算は整数なら整数という集合の中で「閉じて」おり、必ず収束することがわかっている。どんな組合せを選んでも収束する形式操作の理論は、演算の対象に何を**選ぶか**ということに責任をもたなくてもよいのが当然なのである。しかしそうでない場合は、収束率は演算の選択に依存する。たとえば整数同士の割り算を例にとってみよう。7÷2、7÷3、7÷5など、いずれも整数の集合の中に商はない。つまり整数という同質の集合の中では、除法という演算は「閉じて」おらず、必ずしも収束しないのである。商も整数という条件で割り算が収束するためには、6÷2、6÷3のように予め被除数が除数の倍数であるように選んでおかなければならない。このように、整数の集合内で除法という演算を収束させるためには、被除数と除数の双方に対して、きめ細かな条件が課せられる。チョムスキーの詭弁の上品な低俗さは明らかであろう。

文の生成もそれと同じレベルにある。確かに、或るnumerationを作るためにどんな語彙項目を何回ずつ選ぶか、という詳細について句構造理論段階で説明する責任はない。しかし事が文の生成に関わる以上、少なくとも実用的な確率で文の派生が将来収束するように選ぶ必要があるから、そのための選択上の性格規定は、割り算の被除数と除数の関係のように決めておく必要がある。そして句構造構築のためには、無秩序な語彙の集合ではなく意味的设计図が必要なのであるが、それは特定の蛋白質を作るための情報を載せたDNAに相当する。筆者が提唱する位相論的統語観の立体的な節文構造はまさにそれである。

また、C&T理論は数学的な意味での文の「生成」にも失敗している。原理的には無限に長い文に使うためのすべての語彙項目を予め集結させておくことは不可能だからである。

さて私は1996年以降チョムスキーを追跡していないので、彼の理論がどう展開したのかわからない。或いは何かの理論によって1995年のC&T理論は超克されてしまったかも知れないが、1995年段階でこれほど愚かしい言説を吐き、追隨者たちをも呆れさせてしまった事実は残る。だからこれを以て彼の学者生命は終わったと私は診断する。

2. ドイツ語学に残る変形生成文法の傷跡

変形生成文法はロシア語圏でも‘transformacionnaja generativnaja grammatika’の名で知られていたが、英語を規範言語としたそれはロシア語にあまりうまく適合しなかったため殆ど流行らなかつた。一方ドイツ語圏では、細部を追求すれば看過できない問題点もあるが、ドイツ語と英語の類似性がかなりあるので、中途半端に変形文法が適用できそう

な分野があり、学者の中にも中途半端なdevotee がいて、変形文法（或いはそれに触発されて興った関係文法などの新文法理論）の古くて悪い面だけがドイツ語学の中に移入され、化石的に残って学者・学徒の頭脳を呪縛しているような状況がある。

ここで私が論評しようとしていることが西日本言語学会の同僚会員、特に野上さなみ氏に対して非礼にならないように、予めよく釈明しておきたい。私はドイツ語学の真摯で有能な学究である同氏に深い尊敬の念を持つ者であり、『ニダバ』によく寄稿される論文の趣旨には概ね納得し、大いに啓発されている。だから感謝の念こそあれ一片の悪意も持たないのであるが、なおかつ言いたいこと、申し上げたいことがある。

例として『ニダバ』34号の「ドイツ語における自動詞と接頭辞 be- の関係について」の内容に関して若干挙げたい。まず気になるのは「非能格動詞」「非対格動詞」という術語である。これは自動詞の区分で関係文法(Relational Grammar)が言い出したもの、と私は聞いており、原語は‘unergative verb’, ‘unaccusative verb’であろう。このうち後者にも問題があるが、前者は完全な誤解に基づいて作られた名称であり、そもそも能格という格をもたない対格言語に対して「…能格…」云々と言うことさえ変な話である。赤信号ではないが「みんなで渡れば怖くない」では言語類型学者に対して失礼であろう。意味内容から出発する構文／形態論のお立場ならば、その線で術語を創作されてはどうだろう。

それから、自動詞・他動詞という言い方は本来ドイツ語にはあまりなじまない。ドイツ語では必須項と見られる補足成分も前置詞句や与格で表現される auf etw.⁴ warten, jm. helfen のような自動詞があり、対格項を取らないという基準で自動詞に入れられているが、意味論的には2項動詞であろう。前者には代替表現 etw.⁴ erwarten もある。

それからp.74~75に散見する「結果相構造」(…化)を巡る論議であるが、「be-動詞化」は別の語彙項目になるのだから新しく項構造を立てればいいが、同じ基本自動詞が結果相構造を伴うようになることは、単節文→複文の変化が起こったと見なければならぬ。例の、Der Großvater lief sich müde. もそうだが、 $NP_x(\dots V) \rightarrow NP_x(NP_y \text{ } ^V (RP \ V))$ と定式化してみても、意味的に laufen が他動詞になったとは考えられない。なぜなら RP は「項」ではなく情報(いば別文)であり、1項動詞 laufen 自体はまったく意味変化していないからである。ただ、情報の焦点が_{NEXUS}[sich müde]に移っているにすぎない。

最後に、「外項」とか「(直接)内項」とかいう言葉はいかにもチョムスキー(派)的、かつ独善的で、使わない方がいいと思う。外か内か、ということは文法家の主観で決めたことであり、客観的な根拠があるわけではない。筆者提唱のSOOTH2では主語候補が最も早く導入される項であり、いわば「超内項／内々項」という地位で、他動詞の目的語はV本体より遅く導入される指定辞だから、いわば「外項」である。そんな組織化は言語学者 N.Trubetzkoy(1890~1938)の立場でもある。SOOTH2ではVPの外側に更にAGo という述語とその指定辞があるから、‘RP’も楽に収容できるメリットがある。因みにドイツ語特有の分離動詞のうち他動詞の分離前綴も概ねAGo 位置を使って分析できよう。

3. 再帰許容中間構文 sich V lassen の位相論と、まとめ

本誌25号で、或るもの(物/者)の内在徳性を主語とする主節が、そのものの物理的実体に向かう外部からの動作・作用を語る従属節を制御し、成立の可能/不可能や過程の難易などを表現する再帰許容中間構文の句構造を(旧SOOTH図式で)分析した。そこで今回はそれをTVS(位相論的統語観)で分析してみる。

(3) Sie lässt sich tragen. 「彼女/それは運べる」(の意味なる駝)

図1

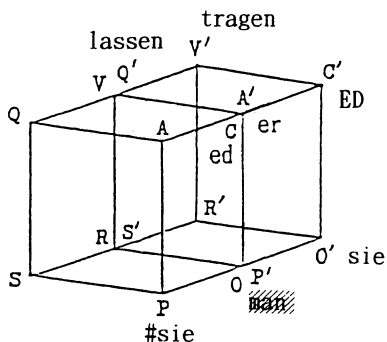


図2

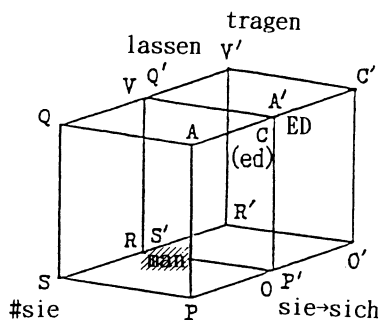


図1は(3)の「統意構造」であって、枠組は面接着型の lassen-許容構文のものである。特に lassen が表面に現れなくても、この構造でCに ed、A' に er が入っている限り、使役や許容という「枠組構造意味」を内包している。∴これらの述語が、O=P' を占めるNPの性格【主節では使役で、副節では能動】を規定しているからである。Pには #sie があるが、これは事態をコントロールする「彼女/それ」の内在徳性を表わす。O' にはV' (tragen)の目的語としてやはり sie があるが、これは物理的実体の「彼女/それ」である。そして中間のO=P' には日陰の脇役(人、駝)が入っている。

さて、ここから転送によって「統語構造」が作られるが、まず脇役 駝 が上の述語 er, ed とともにR=S' に移動して、もとの位置を空き家にする。そこに使役 sie が転入してくるが、これで #sie と sie とが同じ主節の中に入ったことになり、Binding が働いて後者が sich に変わる。内在徳性と物理的実体とは同じ者/物の別の側面だからである。sie=sich はまた主節から lassen の統率を、副節からは tragen の統率を受けるが、そのことは項の(兼務の)位置からみて領けよう。最後に #sie が主節主語の地位Sに転入して各語の配置は完了する【図2】。あと時制や法、一致の素性が lassen に流入して統語構造が完成し、あと各言語の読み出し規則が働いて統語連鎖が産出される。この過程を見ると、『ニダバ』34号の拙論 p.182の図(6)「論文は先生によって加藤さんに書かせられた」の分析(構築過程)と途中までよく似ていることに気付かれよう。

最後にドイツ語学徒への進言は、既に不良債権化した新言語学などにあまり眼を奪われず、むしろ古いドイツ語学の伝統を踏まえて学識を深化させて行かれることである。